

僕のありふれた日常

谷山 結子

もうすぐだ。あと少しで駅に着く。僕は自転車をこぐ足にいつそう力をこめた。こめかみから汗がふき出す。前方に駅前ビルのでっぺんが見えた。ここまで来れば、もう大丈夫だ。自転車のスピードを緩める。兄が突然家に戻って来ると聞き、朝食もそこそこに家を飛び出したのだ。まだ動悸がおさまらない。

でも、とにかく無事逃げおせた。そう思ったとたん今度は強烈な自己嫌悪に襲われた。兄が来る。ただそれだけのことで、このざまだ。三十五歳にもなって僕はいったい何をしているのだろう。情けなさどみじめさで胸がつかえた。いかげん何とかしなければ。

いや、それでも、と僕は自転車のハンドルを握りなおした。やっぱり兄には会いたくない。会えば、もっとみじめになる。

道路が緩やかな下りに入った。自転車が加速し、真正面に見える駅前ビルがぐんぐん大きくなる。自転車の前かごの中で財布が飛びはねている。色あせて角がすりき

れた二つ折りの財布には千円も入っていない。クレジツトカードや電子マネーはもとから持っていないし、そうなる外出先はおのずと限られる。

幸い、今日は駅前のハローワークに行く用があった。あそこなら金がかからず、長居しても文句が出ない。何より人の視線が気にならないというのが、いい。半年前に失業して以来、家にこもりがち僕が唯一、出かけられる行き先でもある。兄家族が家に来ている間、そこで時間を潰すしかない。

駅の北側に高くそびえる駅前ビルの横を通り過ぎ、高架線路をくぐって駅の南側に出る。高架下には有料の駐輪場があるが、一回につき百五十円の駐輪料金を払う余裕は僕にはない。

南口の改札からすぐのアーケード街の入り口で自転車を降りた。自転車を押してアーケード街の通路を歩きながら、両側に並ぶ店の前をチェックする。パチンコ店の前まで来て、やはりここが最適な場所だと思った。常におびただしい数の自転車が停められていて、僕の自転車が一台くらい加わっても目立たない。店の前の柱に針金でくくりつけられた「放置自転車 禁止区域」の看板が、何台もの自転車を寄りかかれて大きく傾いていた。

パチンコ店の前に自転車を停め、いま来た道を歩いて戻る。駅の高架下を今度は逆に南から北に通り返り抜けて駅

の北側に出ると、目の前がバスターミナルだ。その向こうにデパートと駅前ビルが並んでいる。人通りの多さに思わず身震いし、足が止まった。

ハローワークが入っている駅前ビルまで、地上から行くか、それとも地下から行くか。地上はこのとおりで溢れている。でも地下だって同じだろう。今日は土曜日の、しかも昼どきだ。地下のレストラン街の混雑ぶりを想像しただけで気が遠くなる。

他人の視線が気になり出したきっかけは覚えていない。少なくとも中学生のころには教室にいるのが苦痛だった。常にクラスメートの視線に怯え、誰かが話をしていて自分のことを噂されているのではと疑い、友達は一人もできなかった。

それは今も変わらない。教室のような狭い空間も苦手なら、あらゆる方向から予測不能に人が湧いてくる屋外も苦手だった。特に今日のように春うららかな休日には、人出が多いに決まっている。普段なら絶対に外出しない。今朝のことを思い出して、僕はため息をついた。

今朝、いつもどおり十時すぎに起き、二階の自分の部屋から一階に下りると母の姿がなかった。一階は台所と居間がひと続きになった部屋のほかに、トイレと風呂場があるだけだ。トイレにでも行っているのかと思ったが、そんな気配もない。食卓には僕の分の朝食がきちんと用

意されていた。

父と母はとつくに朝食をすませ、台所の流しの水切りカゴに洗い終わった二人分の食器がふせられている。いつもなら母が台所とリビングを行ったり来たりしているのだが、今朝はしんと静まり返っていた。自分が味噌汁をすする音、茶碗を食卓に置く音がやけに大きく感じる。

朝からどこかに出かけたのだろうか。この時間に母がいないなんて、僕の知る限り今までなかった。まさか事故に巻き込まれたんじゃないだろうな。不安がよぎった時、玄関の方で足音がした。廊下に通じる扉の取っ手を片肘で押さえ、背中で扉を押し開けながら後ろ向きに入ってきたのは母だった。思わず安堵の息がもれる。

両手に一つずつ持ったスーパールのレジ袋を重そうに食卓の上に置くと、母は「今日、お兄ちゃんたちが来るから」と言った。

僕は息が止まりそうになった。箸ではさんだ目玉焼きが食卓の上にボトリと落ちた。

「なんでまた急に」

声がかすれる。

母は買ってきた食材を袋から次々と取り出し、台所に並べたり冷蔵庫に入れたりしている。

「今朝早く、お兄ちゃんから電話があつて。急に休みが取れたから、翔太のランドセルを買に行きたいって」

せめて昨日の晩に連絡をくれたら、もっと早くから準備できたのに、と母はぶつぶつ言いながらも顔は笑っている。翔太というのは兄の息子だ。来年の春に小学一年生になる。

「ゴールドデンウィークは混むから、今日行けるなら今日の方がいいってお父さんも言うし。で、お昼を家で一緒に食べてから、駅前のデパートに繰り出そうということになったの」

母はエプロンをつけて腕まくりをした。

「一年前の四月にランドセルを買うなんて、いくらなんでも早すぎるんじゃないのってお兄ちゃんに言ったんだけど、今年はほら、消費税が十パーセントになるでしょう？ それでランドセル商戦の時期も、前倒しになっているらしいわ」

そんな話はどうでもいい。

「晩はどうするの？」

僕は絶望的な気分になって聞いた。

「そりゃ、みんなで食べるに決まっているじゃない。ランドセルだけ買って、ハイ解散、とはならないでしょうが」

予想どおりの答えに僕はがっくりきた。

「外で食べてもいいんだけど、ランドセルを背負った翔太の写真とか動画を撮りたいから家の方がいいんですっ

て。明日は日曜だから、お父さんもお兄ちゃんもゆっくり飲めるし」

兄たちは、この家に晩まで居座るつもりなのか。僕はげんなりした。せめて外食しろよ。そうすれば僕は家で一人、ゆっくり過ごせるのに。

その時、父がリビングキッチンに入ってきた。父は僕の方をちらとも見ず、まっすぐ前だけを見ている。僕を見ないよう意識しているのが丸分かりだ。しかし、僕の決定的な違いは、父は僕に対してだけ不自然な目の動きになるという点だ。

「ビールとワイン、買ってきた」

父は母に声をかけ、手にした買い物袋を少し持ち上げてみせた。「お父さん、ちょっと味見してくれる？」と母が言った。

僕は食卓で漬け物をかじりながら、台所に並んで立つ二人の後ろ姿を眺めた。母は父に味見用の煮物の小皿を渡すと、お玉でボウルの中身をかきまぜ始めた。ガスコンロの横には、むき海老や、さつまいも、かぼちゃなどのスライスした生野菜がキッチンペーパーの上に並べられている。

「昼から天ぶらを揚げるのか。天ぶらは晩でいいんじゃないか？」

母の肩越しにのぞきこんで父が言った。

「翔太が天ぷら好きでしょ。晩にも出すけど、昼も少し出してあげようと思って」

「だったら、揚げたてを食わせてやった方がいいんじゃないか？ 今から揚げたんじゃ、冷めちまう」

「もちろん、そうするわよ。準備だけはしておかないと」

僕は父と顔を合わせるのを極力避けているので、両親の会話をまともに聞くのは久しぶりだった。もっと父が母に対して偉そうにしているかと思いきや意外だった。

「でも、もうそろそろ来るころよ。お昼を早めに済ませて、すぐランドセルを買いに行きたいってお兄ちゃんからメールが来たから。翔太が待ちきれないですって」

「え。何、もう来るの？」

僕がすっとんきような声を上げると、母が顔だけで振り返り、呆れたという顔をした。

「だから何度も起こしたでしょ。顔を洗って服を着がえて、きちんとした格好でお兄ちゃんたちを迎えてちょうだい」

それを早く言ってくれよ。僕は勢いよく納豆ごはんをかき込むと、ごちそうさまと言って席を立った。

「今から出かけてくる。昼めしはいらないから。今、食べたばかりだし」

つい早口になる。

「あら、そうなの。ハローワークに行くの？」

母はどこまでも無邪気だ。父が顔を上げ、何か聞きたそうに母を見つめた。皮肉なことだが、父が僕を見ないと分かっているの、逆に僕は安心して父を見ることが出来る。

「この子、ハローワークに通っているのよ。私も最近、知ったんだけど」

母に悪気がないのは分かるが、父の前でハローワークのことを言っただけは分かった。だから今まで母にも内緒にしていたのだ。しかし、失業して家でごろごろしていた僕が急に出かけたのを母が心配するので、つい行き先を正直に答えてしまったのだ。

このあとで母は兄にも話すだろう。弟が派遣切りに遭い、そのあと何か月も無職のまま、ハローワークの求人に応募しても書類選考すら通過しないことを知ったら、兄は何と思うだろうか。今さらどう思われてもかまわないが、これ以上バカにされて傷つくのはごめん。

「じゃ、そういうことで」

麦茶のグラスをつかんで喉に流し込むと、僕は起きてきた時の何倍もの速さで二階に駆け戻った。とにかく兄家族が来る前に家を出なければ。取るものも取りあえず玄関に急ぐと、後ろから「晩ごはんまでに帰ってね」という母の声が追いかけてきた。

ハローワークの入り口で思わず足がもつれてよろめいた。バスターミナルからの数十メートルの道中——結局、地上のルートを選択した——すれ違う人々と目を合わさないよう気をつかいすぎたせいだ。このうえ就職相談をする気力が果たして残されているだろうか。それでも、ここで時間を潰さなければ、他に行くあてなどない。

駅前ビル内のワンフロアをぶち抜いたハローワークは、ものすごく広々としている。相談コーナーごとの待ち合いベンチは全て窓口カウンターに向けて設置され、ベンチに座る者どうしで視線が合いにくい。これが僕にはありがたかった。

そもそも、こういう所に来る人間は他人に無関心だ。たいていの来所者は求人情報のファイルをめくっているか、フロア内にある求人検索パソコンからプリントアウトした求人票を見ているか、スマホをいじっているかのいずれかで、自分のことで頭がいっぱいなのだ。窓口で職員と一対一で向き合うのが僕にとって一番の難関だが、順番待ちの間に少しは心の準備ができるし、職員の顔ではなく手元を見ていれば何とか乗り切れる。

いつも僕が来ている「長期非正規」コーナーは、その名のとおり、長期間、非正規の仕事をしている人間を対象とする相談窓口だ。ハローワークの数あるコーナーの中でも、最も就職に縁遠い、つまり僕のような人間が集

まる所だ。なので窓口の職員も、目の前の相談者が目合わさないからといって、とがめ立てたりはしない。むしろ勇気を出して窓口までたどり着いたことを最大限に評価し、相談者の緊張をほぐそうとする。二か月前、初めて僕がハローワークに来た時もそうだった。

三十五になるこの歳まで、僕は正社員として働いたことがない。大学を二年で中退してから、ずっとアルバイトや派遣社員など非正規の職を転々としてきた。

昨年秋、一年半ほど勤めたコンビニ弁当の製造工場をクビになった。コンビニ店舗の売り上げ不振とやらで、工場の稼働を縮小することになり、派遣の契約が更新されなかったのだ。いわゆる派遣切りというやつだ。人と接することのない仕事内容が自分にぴったり合っていたので、かなり落ち込んだ。

次の仕事として派遣会社から紹介されたコンビニ店員の仕事は、即座に断った。同じコンビニ関係だし、いいんじゃないですかとスーツに身をかためた若い男性担当者には言ったが、接客業が僕にとまるわけがない。他に紹介されたのも、引越し業や介護の仕事だった。相手がある仕事は無理ですと言うと、年齢を考えたら選り好みしている場合じゃないですよ、と僕よりひと回りも若そうな担当者に説教された。

それから半年近く経つが、派遣会社からの連絡はない。

僕の希望にマッチする仕事がないということだろうか。担当者に電話で問い合わせしてみようかとも思ったが、ためらっているうちに今になってしまった。

収入が途絶え、貯金を取り崩しながらの生活は想像以上に心細いものだった。そのうち貯金も底をつき、失業して四か月が経って、ようやくハローワークで職さがしを始めたのだ。

順番が回ってきて窓口の席についた時、数日前に郵便で届いた不採用通知を家に忘れてきたことに気づいた。今朝はそれどころではなかったのだが、そうなるかと職員に口頭で報告しなければならぬ。「あの」と言いかけて窓口の中年の男性職員と目が合い、とっさにカウンターに視線を落とした。「また落ちました」と、それだけ言うのにはずいぶん骨が折れる。

職員は自分の横に設置されたパソコン画面に目を移した。僕のいる側からは見えないが、パソコン画面には相談者に関する情報——住所、年齢、学歴、職歴のほか、これまでの相談履歴や、求人応募先とその採用結果などが記録されている。相談者の情報をシステムで管理しているのだ。この男性職員とは今日が初対面だが、彼は今まさにクリックひとつで僕という人間を把握し、評価を下すのだろう。

「もう少し職種の幅を広げた方がいいと思うけどなあ」
男性職員はため息まじりにつぶやくと、太った体を大儀そうに揺らした。

この二か月、窓口で紹介された学歴不問・資格不要の正社員の求人に応募してきたが、決まって一次の書類選考で落ち、二次面接まで進んだためしがない。

「人と接するのが苦手だから接客はダメとか、体力がないから肉体労働はダメとか、そういう条件をつけているうちは、なかなか決まらないと思うんだけど」

やけにはつきり言う職員だ。これは覚悟してかからなければと身構えたが、それきり職員は何も言わない。上目づかいに恐る恐る様子をうかがうと、彼はパソコン画面に見入っていた。

丸々とした顔に丸い金きんぶち眼鏡が団子鼻にちょこんとのっかり、それが顔の一部のようになじんでいる。と、職員が派手なくしゃみをして眼鏡がずり落ちそうになったが、パンパンに張った両頬に金色のフレームが引っかかり、かろうじて落下は免れた。彼は太い指でフレームの真ん中を押し上げ、眼鏡を定位置におさめた。

「あなたは今まで、短期の雇用契約で、工場のライン作業、清掃の仕事、厨房の補助などの経験があるんだよね」
「……はい。決まった作業を手順どおりにこなす仕事なら、僕にもできるんで」

「非常勤ならともかく、正社員でそういう仕事を見つかるのは、ちょっと難しいと思うよ」

金ぶちはパソコン画面から目を離さずに言った。

「でも、無理して苦手な仕事に就いても続かないだろうし、どうしたもんだろうねえ」

ひとり言なのか、それとも僕に話しかけているのか。どっちだろうと考えているうちに、金ぶちはマウスから手を離してカウンターに両肘をつき、むっちりした両手を組み合わせた。フロアの照明を反射して眼鏡フレームがきらりと光り、思わずそちらに目がいった瞬間、金ぶちと目が合う。

「そもそも、なぜ正社員になりたいの？ いや、正社員をめざす人を応援する立場の僕が言うことじゃないんだけど」

「……」

「これまでの相談記録を見たら、あなたは実家暮らしで、生活費はそんなにかからないみたいだし。だったら非正規の仕事が続けながら、苦手な分野を克服して、自分のできる仕事を増やしてから正社員をめざしたらどう？ その方が職業の選択肢も広がって、正社員の仕事も見つけやすいかと思うんだけど」

ま、ちよつと考えてみてよ、と言って金ぶちは相談を切り上げた。

フロアの壁時計を見ると、まだ午後一時前だった。両親と兄家族はランドセルを買いに出かけただろうか。それとも、まだ家で母が作った天ぷらを食べているのだろうか。とにかく時間を潰さなければならぬ。晩をどうするかは、後で考えることにしよう。

僕はパソコン検索コーナーに行き、入り口で職員から番号札を受けとった。札に書かれた番号と同じ番号の席でパソコンを使用する仕組みになっている。席は百ほどある。百個ものパソコンがずらりと並ぶ眺めは、ちよつと見ものだ。

今日はわりと空いていた。こういう時は席が隣り合わないように番号札が割りふられる。自分の席の両隣に誰もいないのを見て僕はほっとした。席につき、さっそく求人への検索に取りかかる。

年齢、性別を入力し、あとは選択肢をクリックするだけなので簡単だ。希望する勤務地のエリア、希望する月収、希望する職種などを選び、検索ボタンをクリックすると、ご希望の条件で〇〇件、ヒットしました、という文字とともに求人情報が画面上にずらつと並んだ。

これだけ求人件数があるのに、いざ応募しても全く採用されないのは、きっと僕に何か問題があるのだろう。しかし、面接で落とされるのなら分かるが、書類選考すら通らないのはどういうわけだろう。書類上では、僕が

視線恐怖症であることも、対人恐怖症であることも分からないというのに。正社員の経験がないことや三十五という年齢がネックになっているのだろうか。

希望する条件を変えて検索したり、求人募集要項を閲覧したりしていると、あつという間に時間が過ぎていった。この分ならハローワークが閉まる午後六時まで早いなと思った時、隣の席に誰かが勢いよく座った。つられて目がいく。長い髪に隠れて横顔は見えないが、若い女性のようなだ。

しばらくして、その人物がこちらを向いた。

「ちよつと、何？ キモいんだけど」

思ったとおり若い。二十歳くらいだろうか。女性というより女の子という感じだ。至近距離で真正面からにらみつけられ、僕はうろたえた。見られている気がして、逆にこちらがチラチラ見てしまっていたのだ。

「あ、いや……」

僕が口ごもると、女の子は汚いものでも見るように顔を歪ませ、舌打ちをして自分のパソコンに向きなおった。

隣の席の机がバンと叩かれたのは、それから数分もしないうちだった。「だから何？」と女の子が叫ぶのと、ペットボトルのお茶がこぼれるのが同時だった。女の子の席のパソコンのキーボードにお茶がぶちまけられる。

女の子は一瞬、キーボードを見つめていたが、こちら

を振り返って「あんたのせいだからね」と吐き捨てるように言うなり席を立ち、足早に去って行った。

何の騒ぎかとやってきた女性職員が、水びだしになったキーボードを見て顔色を変えた。

「何があつたんですか？」

「おたおたして何も答えられない僕を見て、初めは怪訝けげんな顔をしていた女性職員は、やれやれと首を振って立ち去ったかと思うと、今度はタオルを手に戻ってきた。どうぞ座って作業を続けてください、と言われなければ、僕はその場でぼんやり立ち続けていたに違いない。席につこうとした時、何かを踏んだ感触があつた。足元を見ると、イヤリングがひとつ床に落ちていた。

壁時計の針は午後五時を指していた。ハローワークが閉まるまで一時間ほどあるが、僕はもう出ることにした。先ほどの女の子とのやりとりが頭の中で繰り返し自動再生される。ここにいたら気持ちが悪く落ち込むばかりだ。

外に出ると小雨が降っていた。四月とはいえ、雨が降ると肌寒い。地下に通じる階段に足が向いた。

晩までに帰るようにと母は言った。夕食をさつと済ませて二階に引っこむ手もあるかと思つたが、今の精神状態で兄家族がいる家に帰るのは危険だ。これ以上、精神的負荷がかかると自分がどうにかなってしまう。かとい

って所持金は千円もなく、行くあてもない。とりあえず自転車を取りに行こうと思いい、地下街を歩いていると視界の端に何かを捉えた。不吉な予感がした。そちらを向いてはダメだという警告が頭にこだましたが、目をそらすことができない。向こうもこちらに気づいた。

「おじちゃん」

十メートルほど先でピョンピョンと飛び跳ねながら手を振ったのは甥の翔太だった。翔太のそばにいた一団がいつせいに振り返る。父と母、兄とその妻、姪っ子だった。

僕は呆然とした。何という失態だ。僕がじっと見させなければ、甥は僕に気づくことなく、まして両親や兄夫婦が気づくこともなかったのに。彼らは全く別の方向を見ていたのだ。

翔太を先頭に、人の流れに逆らって一団がこちらにやってくる。僕は頭が真っ白になりながら、翔太も、翔太の後ろからついてくる姉の優香も、しばらく見ないうちはずいぶん大きくなったなあと、冷静に思う自分もいた。「偶然ねえ。こんなところで会うなんて」と母が屈託なく笑い、「ちょうど良かったわ。今からみんなで晩ごはんを食べに行くのよ。あなたも来なさい」と僕の袖を軽く引っぱる。

少し離れたところで、兄はスマホを耳に当てて電話中

だった。その横で父がランドセルらしき大きな包みを胸に抱え、兄の妻が叱りつけるのもかまわず駆け回る孫たちを目を細めて眺めている。

最初はね、晩ごはんは家で食べるつもりだったんだけど、この近くにお兄ちゃんたちが家族で行ったことのあるお店があつてね、広い座敷の個室があつて、お料理もなかなからしいの。もし、その店が空いたら行きたいって翔太も優香も大はしゃぎで。私も晩ごはんの準備をしなくていいから楽だし。天ぷら？ ああ、それは明日のメニューに回すわ。何、あなた天ぷらが食べたかったの？ 今から行くお店にもあるわよ、きつと。和食の創作料理のお店らしいし。母の声を遠くに聞きながら、僕は何とかここから脱出する術すべはないかと考えていた。「店、空いてるって」

数メートル先から兄の無情な声が響いた。兄はスマホを耳から離して僕を一瞥し、「何人で予約する？」と母に聞いた。「七人に決まってるでしょ」と母が答える。僕も人数に含まれていた。

地下街の奥まった一角にある和食の店に入ったのは午後五時半だった。翔太と優香が「めんたい卵焼き」と「カニそグラタン」を交互に連呼し、兄が「もう分かったから少しは静かにしろ、お前たち」とうんざりして言った。あの子たちのお気に入りのメニューなんだって、と

母が僕に耳打ちする。どうでもいい話だ。

「カニみそだなんて、優香は大人の味が分かるんだな」
父が感心したように言うと、「おじいちゃん、カニみそって、すんごくおいしいんだよ。知らないの」と優香が叫び、「めんたい卵焼きの方がおいしいんだよ、ねえお母さん」と翔太が負けじと叫び返す。どちらも譲らず延々と同じやりとりが続き、騒々しいことといたらない。大きな座卓の隅でメニュー表を広げて熱心に選ぶふりをしながら、この場をどう乗り切るか、僕はそればかり考えていた。脇の下を汗が伝う。

味にうるさい兄が言うだけあって、料理はどれもおいしかった。この過酷な状況下において、料理を味わう余裕があることに自分でも驚く。誰も僕に関心を払わないおかげだ。

父と兄は僕から一番遠い席で酒を酌み交わしている。翔太は真新しい紺色のランドセルを背負ってポーズを取ったり座敷をぐるぐる回ったりし、それを兄の妻がスマホを掲げて追いかけている。優香は今日おばあちゃんに買ってもらったというピアノの発表会用のワンピースを広げてはしゃいでいる。この調子だと何とか無事に終わるだろうと思った矢先、向かいに座る優香とバチツと目が合った。

この姪っ子は兄と性格がそっくりで、口もえらく達者

だった。この春に小学四年生になり、また一段と、ませた子になっていた。案の定、優香は言った。

「ねえねえ、なんでおじいちゃんはやった仕事をしないの？」

その場がしんとした。みんなの視線が僕に集中する。優香は鼻をふくらませて得意顔になった。この子は自分に注意を引こうとして、わざと言っているのだ。

兄の妻が娘をたしなめる横で、兄はビールグラスを傾けながら「ほんとのことだろ」と口の端を歪ませて笑った。

優香の質問はそれで終わらなかった。おじいちゃんはなんで結婚しないの？ なんでおじいちゃんとおばあちゃんはずっと一緒に住んでいるの？ なんで？ なんで？

兄の妻が娘を黙らせようと躍起になり、母も「優香、アイスクリーム食べる？」とメニュー表を孫の前に広げて見せたが無駄だった。兄はというと、今度は日本酒をちびりちびりとやりながら、まるで酒の肴にちょうどいい景色だともいうように薄笑いで僕らを見ている。僕がいっさい答えないと、優香もかえってムキになるのだった。しまいには自分の母親に「いいかげんにしなさい」と怒鳴りつけられて大泣きした。全く、泣きたいのはこっちの方だ。

それでも僕が憤りを覚えたのは、姪より兄の方だ。日

頃、兄が子どもに僕のことをどう話しているかが分かるというものだ。今はまだ状況が分からず、ぼかんとしている翔太も、数年後には姉と同じようになるに違いない。兄は、娘が泣くのも素知らぬ顔で酒をおおっていた。

三歳上の兄とは昔からそりが合わなかった。子どもどころ、一緒に遊んだ記憶もほとんどない。「とろい」「うざい」「めんどくせえ」が、僕に対して兄が投げかける三大用語だった。内向的な性格で人づきあいも苦手な僕とは違って、勉強も運動も人並み以上にこなし、人づきあいも苦にしない兄は、僕から見れば、すこぶる順調な人生を歩んできた。地元では知名度の高い県立大学に現役合格して親を喜ばせ、県内の信用金庫にすんなり就職が決まり、社内恋愛で同い年の女性と結婚して二人の子を授かり、新築の家も建てた。子ども達はすくすく成長し、四十に手が届こうかという兄夫婦も今のところ健康不安はなく、住宅ローンの返済も順調だという。兄が結婚して家を出てからは年に二回、盆と正月に顔を合わせる程度であるが、毎回、自慢話のようなものを聞かされるのには閉口した。

盆正月に会うだけでもうんざりだというのに、今日のこの事態は、突然ふりかかった災難としか言いようがない。もはや料理の味もすっかり分からなくなり、これ以上は限界だと思った時、ようやくお開きとなった。

家が逆方向の兄家族とは、駅の改札前で別れた。あれほど飲んだというのに兄は顔色ひとつ変えず、足取りも言動もすっかりしている。店での僕をバカにしたような態度は、酔ったせいではないということだ。

アーケード街に向かおうとすると、どこ行くの、と母が心配そうに言った。さっき店を出る時も、母は僕を目をのぞきこんで、大丈夫？ とささやいた。視線が合っても緊張しない唯一の相手が、この母だった。地下街の真ん中で、ふいに涙がこみあげそうになり、僕は慌てて母に背を向け、無言で歩き出した。遅くならないうちに帰ってくるのよ、という母の声を背中で聞いた。

アーケード街の天井からぶら下がる大時計は、午後九時半を指していた。パチンコ店の前まで来て、僕は呆然とした。僕の自転車がない。こんなにたくさん自転車が停まっているのに、僕の自転車はない。パチンコ店の喧騒が外まで漏れ聞こえる中、店の端から端まで探したが、やっぱりなかった。店の営業中に撤去されることはあり得ない。放置自転車か、店の客の自転車か、区別がつかないからだ。だからこそ、僕も安心してここに停めに來るのだ。

パチンコ店の隣は銀行だった。格子状のシャッターが下ろされた銀行の前にふと目をやると、通路に貼り紙があった。四月〇日、自転車を撤去しました、という赤い

文字が見えた。僕が自転車を停めたのはパチンコ店の端で、すぐ横が銀行だ。あとから自転車を停めに来た人間が、僕の自転車を銀行側に押しやったのに違いない。休業日でシャツターが下ろされてる銀行の前に駐輪すれば、明らかに放置自転車ということになる。僕は貼り紙に近づいた。よせばいいのに撤去の時間を確認せずにはいられなかった。

「四月〇日（土）午後六時半」

僕は思わず両膝に手をつき、うめいた。兄たちに地下街で会わなければ。ハローワークを出てまっすぐここに戻ってきていれば。そうすれば余裕で間に合っていた。夕食の席であんなに嫌な思いをすることもなかった。

いや、兄たちのせいではない。そう思ったとたん、全身の血の気が引いた。この事態を招いたのは自分だ。地下街で甥っ子を凝視して、こちらに気づかせてしまった。あれが全ての始まりだ。

貼り紙には、撤去された自転車の保管場所が記載されていた。電車でしか行けない距離だった。二五〇〇円の保管料を持って、一か月以内に引き取りに来なければ処分するという説明を読むうちに、僕は声をもらして泣いていた。貼り紙の前にしゃがみこみ、しばらく動けなかった。

僕の顔を見て、久しぶりだね、とは金ぶちは言わない。この一か月どうしていたの、とも聞かない。相談者にプレッシャーをかけないためだ。そのあたりはプロだなと思う。五月中旬、僕は一か月ぶりにハローワークにやってきた。家から歩いて一時間半、消耗したのは体力よりも気力の方だった。とりわけ人とすれ違う時に目のやり場に困った。相手からすれば、さぞ挙動不審に見えたことだろう。自転車のありがたさが今さら身に染みる。

自転車が撤去された日の夜も、僕は駅から家まで歩いた。帰宅したのは日付が変わるころだった。それから一か月、僕はひたすら寝て過ごした。寝るのに飽きるとベッドの中で本を読んだ。僕の部屋にはネット環境がない。テレビすらない。携帯電話は派遣会社との連絡に欠かせなかったもので、いちおうガラケーを持ってはいるが、電話やメールをする相手もおらず、使うことはまずない。

そして、本だけは豊富にあった。ここが僕の部屋になる前は両親が本の置き場所として使っていたらしく、両親それぞれの愛読書が本棚にぎっしり詰まっている。僕は周りからすぐ無口な人間だと思われているが、小さい頃から本に親しんだおかげで、語彙力だけは人並み以上にあった。ただし、その能力が発揮されることはない。僕は脳内会話と命名しているが、頭の中に限って常に饒舌なのだった。

母は何も言わなかった。それがありがたかった。父は、母から僕の様子を聞いてはいるだろうが、だからといって僕に接触してくることはない。

父はとつくの昔に愛想を尽かしたのだ。他人の視線が怖くて教室にいられないという僕の状況は、父には全く理解できないものだった。怠けるな、甘えるな、学校に行け、と怒った。僕の部屋にあったテレビとゲーム機は、ひきこもりを助長するという父の意見によって撤収された。僕が面接を受けさえすれば合格できるという高校に入ったころには、父はもう何も言わなくなっていた。

兄と同じく、父も順調な人生を歩んできた人間だ。大学卒業後に就職した印刷会社で四十三年勤め上げ、今年六十五で定年退職を迎える。母に聞いたところでは、定年後も再雇用契約で残ってほしいと会社から言われているらしい。父の人生に誤算があるとすれば、それは僕だろう。

大学進学後も、僕の症状は一進一退した。大学は電車でないといけない距離だった。最初はがんばった。それが良くなかったのか、周りの乗客に見られている感じがしだいに過敏になっていった。ついには電車に乗れなくなり、当然の帰結として留年した。

大学を辞めたいと母に伝え、それが母から父に伝えられた時、父は猛烈に反対した。僕が大学に入学する時は、

「あんな五流大学、大学と名乗るのもおこがましい」「親戚に言えるか。俺が恥ずかしい」などと母に対して散々わめいていたくせに、いざ中退となると、「大学だけは出ておいた方がいい」と手のひらを返した。僕に直接、説得を試みたのには驚いた。父が僕の部屋まで来るのは中学の時以来だった。

それを最後に、父は僕の部屋に近づきもしない。愛読書を読み返したくなった時はどうするのだろう、と僕はふと思った。

「あれ？ あなた心療内科にかかったことがあるの？ 記録にそう書いてあるけど」

パソコン画面を眺めていた金ぶちが手を止めて言った。以前、窓口でそんな話もしたかもしれない。

「二十歳のころに通院していたって記録にあるけど、今も通院しているの？」

「……はい、たまに」

とつさに嘘をついた。本当は心療内科に受診したのは一回きりだ。大学中退を認めるかわりに、心療内科に行くことを両親が提示してきたのだった。僕は病気じゃないうとつっぱねたが、病気とまではいなくても何かあるかもしれないでしょう？ 実際、家にこもってばかりだし、一度、診てもらいましょうよ、ね？ と母に懇願され、渋々承知したのだった。正直なところ、この生きづ

らさ、閉塞感、他人への恐怖心、そういったものがどこからくるのか、僕自身、知りたかったというのもある。

医者は付き添ってきた母に席を外させ、僕と一対一になっていろいろ聞いてきた。世間話をしながら話を引き出すのが上手く、さすが専門の医者だと感心したのを覚えていいる。診察後、今度は母だけが呼ばれた。

その日の夜中、トイレに行こうとして自分の部屋を出ると、階下から話し声がした。暗い階段を下りてリビングに通じるドアの前で耳をすますと、母が今日の受診結果を父に報告しているようだった。

医者は母に対して、息子さんは不安障害の可能性が高いとか、うつ症状もあるとか、そういうことを言ったらしい。医者は早期治療の重要性を説き、まずは診断をつけるために定期的を受診するよう母に強く勧めたという。僕にはそのような話はいっさいなかった。

父の反応はドア越しには分からなかったが、「同じ兄弟で、なぜこうも違うんだ」という声だけは、はっきり聞こえた。僕はドアからそっと離れて、足音を立てないよう階段を上がり、自分の部屋に戻った。

医者には二度と行かなかった。何とか僕を病院に行かせようと母が必死になればなるほど、僕は行く気をなくした。母に泣かれても意に介さなかった。初めて病院に行った夜、兄と僕とを比べる父の言葉に、母も同意して

いたではないか。

そして今に至っている。母が僕を注意したり責めたりしないのは、一つにはこの時のことがあったからだと思う。

「だったら、もしかしたら障害者の手帳を取得できるかもしれない」

金ぶちがにわかになつて真剣な顔つきになった。だから病院には十五年も前に一回行ったきりなんだってば。そう思うだけで言葉にはならない。僕はいつもこうだ。つまりね、と金ぶちがカウンターに身を乗り出した。

「手帳があれば、障害者を対象とする正社員の求人に応募できるんだよ」

障害者雇用の制度だと金ぶちは説明した。企業、国、自治体には一定の割合で障害者を雇う義務がある。対象になるのは障害者手帳を所持していることで、一人ひとりの障害の状況——あなたの場合だと接客が苦手だとか、体力が続かないとか——を考慮した仕事が用意されることになっていいる。という話だった。興味ある？ といきなり聞かれても、どうしていいか分からない。

僕の戸惑いをよそに、金ぶちは「ちよっと聞いてみるだけ聞いてみよう。いいよね」と言うが早い、そばにあった電話の受話器をつかんだ。どうやら内線のような電話を終えた金ぶちは、「精神障害者手帳の対象になる可

能性があるから、今から相談に来てくれって」と一人で満足そうにうなずくと、「障害者相談」コーナーの場所を説明し始めた。

「障害者相談」のベンチで順番を待ちながら、僕の頭は混乱していた。訳が分からない。障害者、手帳などと言われても何のことだかさっぱりだ。先ほど、金ぶちが内線電話の相手に僕の名前も伝えたので——伝えていいかと聞かれはしたが——相談に来ざるをえない状況になったが、やっぱり止めますと言って相談をキャンセルできないだろうか。

いや、それはまずいと僕は思い直した。

今後、「長期非正規」に戻るにしても、窓口の職員は相談記録には必ず目を通す。障害者相談の結果がどうなったのかと聞かれるのは確実だった。

なぜ、今も通院しているなどと金ぶちに言ってしまったのだろう。僕は悔やんだ。母の説得を振り切って通院を中断した後ろめたさが、どこかにあったのかもしれない。あれから十五年が経つ。精神障害者の手帳を取得するには、まず医者 of 診断が必要だと金ぶちは言っていた。その時点でアウトだ。

とりあえず一回だけ相談しよう、と自分に言い聞かせる。それで手帳の取得は難しいと言われたら、正々堂々

と前の相談窓口に戻ればいいのだ。

カウンターの相談を終えた人が立ち上がった。電光掲示板の「お呼び出し番号」が変わり、ピンポンという呼び出し音が鳴った。いよいよ、この次が僕の番だ。

尻のあたりがもぞもぞしてきた。不安と焦りが交互に押し寄せ、暑くもないのに手のひらがじっとり汗ばむ。居ても立ってもいられずベンチから腰を浮かしかけた時、突然、甲高い声が出た。驚いて顔を上げると、カウンターの真ん中の席で女性が職員に向かって叫んでいた。

「だーかーらー、手帳が切れたら困るんだってば！ 障害者じゃなくなったら、障害者雇用の仕事ができなくなるじゃん」

ベンチにいる僕からは女性の後ろ姿しか見えないが、声や服装からして、かなり若そうだ。対応している職員も若い女性で、困り果てた顔をしている。両隣の職員と相談者が、いったい何事かと見つめていた。

「障害者手帳のことは分かりません。専門外ですので、ここで言われても。役所の担当窓口で聞いてください」女性職員の説明に、「んなこと分かっているって！」と叫んで立ち上がった女性がくるりと振り返った時、僕はあつと声を上げそうになった。一か月前、パソコン検索コーナーで僕の隣に座っていた子だ。

こちらに向かって突進してくる。眉をつりあげ、長い

黒髪をなびかせて一直線に近づいてきた女の子は、そのままの勢いでベンチにドスンと座った。女の子と僕の間には、一人分のスペースしか空いていない。パソコンの隣の席から「キモい」と言われたことがよみがえり、めまいがして頭がぐらりと揺れた。その瞬間、女の子とともに目が合う。と思ったら、女の子の視線は僕の顔の上を素通りしていった。窓口で対応していた女性職員が小走りにやってきた。

「あの、手帳の手続きの担当窓口をお伝え——」

女性職員が言い終わらないうちに女の子が叫んだ。

「んなこと分かってるって、さっき言ったでしょ！ 今手帳があるんだから、手続きのしかたくらい知ってるよ！」

「え、と。じゃあ、今日はどういご相談で来られたんですか」

「だから手帳が切れたら、今の仕事ができなくなるから困るって話よ」

「今の仕事って、先ほどおっしゃった障害者雇用の仕事ですよ。手帳が切れたら障害者ではなくなるので、退職していただくことになりますよ」

「それはさっき聞いた。しつこい！」

「だったら、どういご相談ですか。ここは障害者相談の窓口ですから、障害者でない人の相談は受けられません

ん」

女の子が弾けるようにベンチから立ち上がり、女性職員が後ずさりした。二人からメートルも離れていないところにいる僕もつられて上半身をのけぞらせた。

「私は障害者だってば！ いつ障害者じゃないって言ったよ。人の話、聞いてんの？ 私がむかっているのは、あなたのその言い方よ。もし手帳が更新できなかったら、どうなるのかって相談したただけなのに、何なのあなた。その、人の神経を逆なでするような、お役所的なモノの言い方。ほんっと、むかつくんだけど」

真つ赤な顔で一氣にまくしたてる。女性職員の頬も、みるみるうちに紅潮した。職員が何か言おうとした寸前、横から初老の男性職員が割って入った。女性職員に下がるよう手ぶりで示しながら女の子に正対し、落ち着いた口調で話しかける。女の子は腕組みをして肩をいからせていたが、徐々に怒りがおさまるのが、傍はたからでも分かった。

女性職員はしばらくその場に立ちつくしていたが、気を静めるように胸元を手でおさえながらカウンターの中に戻ると、手元のスイッチを押した。電光掲示板の数字が変わり、僕の順番がきた。

女の子の怒り狂う姿が頭から離れなかった。すごいエ

ネルギーだ。人というのは、あれほど感情をむき出しにできるものなのか。それに、彼女は自分が障害者であることを隠そうともせず、いや、それどころか、障害者であることを熱望し、それを人前で堂々と宣言したのだ。

肝心の「障害者相談」の初回相談で、僕はずっと上の空だった。それは応対した女性職員も同じだったようで、つい先ほど女の子と話していた時と比べて明らかに元気がなかった。通院歴と職歴を聞かれ、手帳について一通りの説明を受けると、また来てくださいと言われて相談はあっさり終了した。今すぐ相談に来るようにと内線借金ぶちに言ったのは誰だか知らないが、それからするとずいぶん温度差がある。

帰ろうとしてハローワークの出入り口に行くと、さっきの女の子がいた。横にいる友人らしき女の子と何やら立ち話をしている。

見た目が対照的な二人だった。女の子は長い黒髪に全身黒ずくめで、ヒールの高い黒のブーツが足の長さを強調している。その友人らしき子は、太っているわけではないが、黒ずくめの女の子の横に立つと、ぽっちやりして見える。こちらはショートカットの髪を緑色に染め、服は白に近い色だった。

二人の服は黒か白の一色だけのように見える、色合いや質感が微妙に異なり、少し動くだけで印象が変化した。

二人とも、ファッションに疎い僕でも分かるくらいにセンスがいい。

黒髪の女の子と目が合った。一瞬どきつとしたが、彼女の視線は僕の顔を素通りしていく。やはり気づかない。僕は彼女から受けたダメージからまだ立ち直れないというのに、向こうにとっては記憶にもとどまらない程度に取るに足らない出来事だったのだろうか。

僕はジャンパーのポケットに手を入れた。指先に金属性のものが触れる。パソコンの席で拾ったイヤリングだ。あの女の子の落とし物だとは思いが確証はない。どうしようか迷っている、女の子が総合案内のカウンターに近づき、職員に何やら話しかけた。数メートル離れた僕の耳にも切れぎれに届く会話のなかに「落とし物」「イヤリング」という単語を捉え、とたんに僕は緊張した。僕は恐る恐る総合案内に近づいた。

半円状のカウンターの縁にしがみつき、身を乗り出して「だから、ちゃんと調べてよ」と職員に訴えている女の子の横顔をじっと見てしまう。どう声をかければいいのか分からない。女の子がこちらを振り向く。電流が走ったみたいに背筋がピンと伸びた。また「キモい」と言われる前に、僕は「これ」と腕を前に伸ばし、手のひらを上にして握っていた拳を開いてみせた。

「あ、そのイヤリング」と叫んだのは、女の子の向こう

側にいた緑色の髪の女の子だ。

「リカ、良かったじゃーん、見つかった」

総合案内の職員がほっとした顔をした。

リカと呼ばれた女の子は、無言で僕の手のひらの上のイヤリングを凝視したまま動かない。僕はいたたまれなくなつて、自分から動いた。イヤリングをつまみ上げ、総合案内のカウンターの上に置く。

するとリカはバッグからポケットティッシュを取り出し、それでイヤリングを包んだ。僕が触ったものに直接手を触れたくなかつたということか。これでは「キモい」と言われたも同然だ。

「このイヤリング、この子のお気に入りなんだよ」

友人の無礼をとりなすように緑色の髪の彼女が僕に向かつて言った。

「余計なこと言わなくていいから。ほらミサキ、カフェに行こ。おなか空いちやつた」

ティッシュに包んだイヤリングをバッグに入れ、リカが先に行きかける。「お兄さんも来ない？」と言ったのはミサキと呼ばれた緑色の髪の彼女だ。「は？ 何言ってるの、あんた」リカがミサキをにらみつけた。

「だってイヤリングを拾って、わざわざ渡しに来てくれたんだし」

「落としてから一か月も経ってるじゃん。なんで、自分

ですつと持つてるわけ？ 拾ってすぐにハローワークの職員に届けてくれたら良かったのに」

思いつきもしなかつたが、なるほど言われてみれば最もなことだ。

「落とし物が届いていないか、ハローワークに来るたびに確認していたこっちの身にもなつてよ」

と言うことは、ハローワークで落としたという確信があつたのだろうか。落とした場所がパソコンの席だという見当もついていたのか。だとしたら僕の顔も覚えていそうなものだ。いろいろ疑問が頭をもたげたが、結局、僕が発したのは「え」だの「あ」だの言葉にならない声だけだった。

「早く行こうつてば。ランチの時間、終わっちゃうじゃん」

僕のことにかまわず行ってくれたらいいのに、ミサキに「お兄さんはどうする？」と聞かれて、僕のおなかがあぐらと鳴った。ミサキが笑い出し、「ほら、行こう行こう」と僕の肩をバシバシ叩く。けっこう痛い。

勝手にしな、とリカは言い捨てて、さっさと歩き出した。ミサキはその後を追いかけながら僕を手招きした。

二人の後ろからエスカレーターで下の階に降りていく。

エレベーターでなくて助かった。あの狭い空間に他人と

一緒に押し込まれたらパニックになってしまう。

エスカレーターの何度目かの切り替えで方向転換し、さらに下に降りようとしたら、リカとミサキがフロアを歩き出しているのに気づいた。慌ててエスカレーターに乗せかけた足を引っこめて二人の後を追う。

通路の突きあたりの店の前で二人が僕を待っていた。ガラス張りで、見るからにおしゃれな店だ。これは場違いもはなはだしい。女性客しかない。

四人がけのテーブル席に案内され、隣にミサキ、向かいにリカが座った。緊張と不安で、空腹感は飛んでしまった。コーヒーを注文すると、砂糖とミルクはどうするか、ケーキセットがお得だとか、注文を取りに来た店員がなかなか下がってくれず、しどろもどろの受け答えになってしまった。

リカとミサキの反応をうかがうと、二人はメニュー表を食い入るように見つめている。僕のことなど眼中にならない様子にほっとする。二人はパフェを注文した。ランチを食べる話はどうなったのだろうか。

運ばれてきた種類の違う大きなパフェを二人はいろいろな角度から眺め回し、スマホで写真を撮り、お互いのパフェを味見すると、あとは猛烈な勢いで食べ始めた。僕のコーヒーが運ばれてきたころには、二人ともすでに半分ほど食べていた。

「リカ、お兄さんに聞きたいことがあるんでしょ」

ミサキの言葉に、スプーンで生クリームをすくおうとしていたリカの手が止まる。怒ってはいない。どちらかというと困っている顔だ。ハローワークに落とし物を届けなかったせいで、僕はリカに恨まれているのではないかと思っていたが、どうやら違うようだ。

「手帳がどうのこうのって言ってたじゃん」

ミサキが重ねて言う。リカはすねたように口を尖らし、そっぽを向いた。何なんだ、いったい。

「お兄さんにあんな態度を取ったから、ぼつが悪いんだよ、きつと」

リカが余計なことを言うなというふうにもうミサキをにらみつけたが、ミサキはかまわず続けた。

「お兄さん、今まで手帳なしで働いてきたんでしょ？ それってどんな感じなのか、リカが興味あるんだって」
二人の視線を感じ、それだけで僕はもう何も考えられなくなった。

うつむいてただ黙っている僕の態度に、リカはしびれを切らしたらしい。「だーかーらー」と唐突に叫んだ。周りのテーブルの視線がいつせいに集まる。僕は思わず縮こまり、目をつむった。

「リカ、静かにしなって」

ミサキに言われるまでもなく、リカはすぐに黙った。

僕が首をすくめて文字どおり小さくなるのを見て、リカが息を呑むのが心配で分かった。三人の間に沈黙が流れる。店内のざわめきが戻ってきた。

「何よ。そんなにびびらなくてもいいじゃん」

ややあつてリカが言う。

「なんか私が悪いことをしたみたいじゃん。やめてよ、そういうの」

いいから、もう、とミサキがリカをたしなめる。

「黙ってないで、何とか言えよ」

リカの声が再び大きくなりかけたところで、ミサキが割って入った。

「だから、それがお兄さんの障害なんじゃないの」

友人のこのひと言は効いたらしい。リカは咳払いをし、「仕方ない。分かったわよ」と気を取り直すように言った。

「お兄さんさ、さつきハローワークで手帳を取るかどうかどうしようかって相談してたでしょ」

リカは数秒ほど僕の反応を待ち、無駄だと分かると先を続けた。

「お兄さんの相談の内容、後ろのベンチまで聞こえてたの。言っとくけど、盗み聞きしたわけじゃないからね」

確かにリカが女性職員と言い合いになったあと、あたりは静まり返っていた。カウンターの話し声がベンチま

で聞こえても不思議ではない。しかし、あれだけ興奮しておいて、よくそんな余裕があったものだ。

「なんで手帳を取ることに抵抗があるの？」

思いがけない質問に顔をあげると、リカとまともに目が合う。その真剣なまなざしに、今度は僕が息を呑む番だった。

「手帳を取りたいなら医者にご相談してみたらって、あの女に言われた時、お兄さん、うろたえてたじゃない」

あの女、とはリカと揉めた女性職員のことだ。リカはよほど腹に据えかねているらしい。

「え？　なんで手帳を取るのに医者にご相談しないといけないの？」

ミサキが首をかしげる。

「精神障害の場合、医者の診断が必要なんだって」

「へえ、私たちとは違うんだね」

僕は思わず隣のミサキの顔を見た。私たち？

「リカから聞いてない？　私もいちおう障害者なの。つい最近、手帳から外れちゃったんだけど。私たち、支援学校の同級生なんだよ」

「……支援学校？」

僕の反応に、二人は顔を見合わせた。

「障害のある子どもが行く学校だよ。お兄さん、知らないの？」

ミサキは信じられない様子だ。

「お兄さんってホントに、今まで一般社会の荒波に揉まれて生きてきたんだね」

リカが感心したように言った。

いや、だから障害があるとはいえないって、さっき窓口で言われたんだけど。と、心のうちでつぶやくだけで、声にはならない。

聞いてもいないのにリカとミサキは自分たちのことをしゃべり出した。中学までは、それぞれ地元の学校に通い、同じ支援学校の高等部に入学して出会ったらしい。知的障害の子どもが行く学校だという。

「中学で勉強についていけなくてさ」と二人は口をそろえた。二人とも担任教師の勧めで役所の検査を受け、その結果、知的障害の手帳を取得したという。

手帳には有効期限があり、知的障害の場合、更新時に役所で検査をするそう。その検査で引っかかるなければ（つまり成績が良ければ）、「正常」と判断され、手帳は更新されない。手帳がなければ障害者雇用の対象から外れ、退職しなければならぬという。

「次は自分の番だって、リカがびくびくしちやって」

ミサキが肩をすくめた。

「そりやそうだよ」と、リカが叫んだ。

「今まで障害者として生きてきたのにさ。いきなり、こ

れからあなたは障害者ではありませんって言われて、世間に放り込まれるんだよ。何のフオローもなく一般人と同じ土俵で戦うなんて、そんなの無理だし」

リカが一気にまくし立てた。

「リカも私も、ボーダーラインだからね」

ミサキがパフェの底のコーンフレークをスプーンでガシガシと砕きながら言った。

「ボーダーライン」

僕がオウム返しにつぶやくと、ミサキは手を休めずにうなずいた。

「障害があるかないかの境目、ギリギリのラインってこと。要するに、私たちは障害が軽いの。いつ正常と判定されてもおかしくないレベルだって、役所からも言われていて。で、私はつい最近、更新の検査で正常ってことになって、手帳をもらえなかったわけ」

ミサキはスプーンの先でリカを指した。

「この子も来年が更新の時期だから、それで焦ってるのよ」

「うるさいって。焦ってるとか言わないで。余計に焦るから」

リカがしかめっ面をした。

話の内容がよく分からなかった。ただ、自分のことをこれほど大っぴらに語る二人の姿に、僕は圧倒されてい

た。

「それよりお兄さんの話はどうなったの」と、ミサキがリカに向かって言った。

「そうだった。うん、なんで手帳を取りたくないのか」

「いや、別に、取りたくないとは……」

僕は慌てて言った。

「そういうふうに関心したけど？」

最後の「ど」のところでもリカは首を横にかくんと倒した。凶星だった。確かに僕は、手帳を取ることに抵抗があるのだ。

いつの間に注文したのか、店員がホットケーキを運んできた。

「お兄さんも食べる？ パンケーキ」

僕が断ると、リカはホットケーキの皿を自分の手前に引き寄せ、小さな瓶に入ったシロップを全部ホットケーキにかけて。「おいしそ〜」とミサキが歓声をあげる。

二枚重ねのホットケーキの下の段にもまんべんなくバターとシロップをしみこませたところで一枚ずつ分け合い、二人してほおぼる。あの大きなパフェを平らげたあとで、すごい食欲だ。見ているだけで胸やけがしてきた。

「通院せずに十五年もそれなりに生活できていいるなら、手帳の取得は難しいと思います」

窓口でそう言われた時、僕は正直ほっとしたのだった。

「手帳があれば、就職で有利になるのに」

すでに最後の一切れをフォークで突き刺しながらリカが言い、「派遣切りに遭わなくてすむよ」と付け加えた。どうやら窓口でのやりとりを全て聞いていたらしい。

ちなみにリカとミサキは正社員だという。

「企業の障害者雇用だね。雇う側にもメリットあるし、ハローワークが間に入ってくれから、自分に向く仕事が見つかりやすいんだよ」

メニュー表に手を伸ばしてリカが言った。まだ食べる気だろうか。

「仕事って、どんな……」

声がかすれる。電池切れだ。体力、気力ともに、そろそろ限界にきていた。

「私は銀行、ミサキは車の会社」

名前を聞くと、誰もが知る大銀行、大企業だった。思わず「すごい」と声が漏れる。

「全然すごくない、すごくない」

ミサキが顔の前で手を左右に振る。

「大きな会社は子会社を作って、そこで障害者を雇うんだよ」

「障害者の雇用人数をクリアしないと、国に罰金を払わないといけないからね」とリカも言う。

「でも、私は今月で終わりだ」

ミサキが天を仰いだ。

「これからどうするの、ミサキ」

「さあ、分かんない」

天井を見つめたまま、ミサキがつぶやく。

「お兄さんと同じだね。これからは一般人に混じっての就活。ドキドキわくわくして感じ」

明るい声の中に不安がにじみ出ている。

「お兄さんはどうするの。やっぱり手帳なしで就活？それとも医者到手帳が取れるか相談する？」

リカが僕の顔をのぞきこむ。

「……分からない。でも、手帳は取れないってハローワークで言われたし」

だからそれは医者に聞いてみないと、とは言わず、リカはメニュー表をパンと勢いよく閉じた。この話は終わり、と言われた気がした。

手帳を取得すること、すなわち自分は障害者だと認めることを僕は恐れている。それをリカに見透かされている。

「最初から決めつけしないで、ダメもとで医者に相談してみたら？ 少しでも可能性があるのに、もったいないよ。私だったら絶対、医者に行くけどな」

手帳を更新できなかったミサキが言う。

「あ、ここはコーヒーおごるから」

リカがそっけなく言った。コーヒーは手をつけられないまま、すっかり冷めている。

「僕は正社員になりたいんだ」

思いがけず強い口調になってしまった。

二人が顔を見合わせる。

「だから何？」

リカににらみつけられ、僕は目を伏せた。

「手帳を取らないからといって、正社員になりたくないわけじゃないんだ」

つつかえながら何とか返す。

「誰もそんなこと言ってないじゃん」

「そうだよ。一般で就活を続けるんでしょ？ それでいいじゃない」とミサキも言う。

「手帳、手帳って、君らが言うから」

自分の顔が熱くなるのが分かった。

「いや、それは、正社員になれる可能性が高くなるから。お兄さんのためを思って言ってるんじゃない」

リカのボルテージが一気にあがる。

「そうだよ。私だって今月いっぱい失業するから一般で就活を始めたけどさ。正社員の仕事なんて、全然決まらないよ？」

「……」

「そもそも三十五歳で初めて正社員をめざすって、めちゃくちゃハードル高いじゃん。しかもお兄さん、しゃべるのも苦手そうだしさ」

「リカ、それは言いすぎだつて。今が一番若いんだし、今、正社員になっておかないと、ますます年を取ってハードルが上がっちゃう」

「だから正社員になる確率を上げるために、手帳を取る選択肢もあるよって親切で言ってるじゃん。お兄さんみたいな人、一般で就活したって勝ち目ないんだし」

「やめなよ、リカ。言いすぎだつてば」

僕はテーブルの一点を見つめていた。木目調で年輪が渦を巻いている。これは本物の木だろうか、と思った。

「だいたいさ」

視界の上の端で、リカが腕組みをした。

「お兄さん、正社員になりたいと思ってるじゃないの」

「またしても凶星だった。」

テレビのバラエティー番組の騒々しい音をBGMに、母と僕は黙々と夕食を口に運ぶ。夕食はいつも母と二人だ。再びハローワークから足が遠のいて、一か月が経っていた。

毎日、家でごろごろしている僕に、母はしかし何も言

わなかった。父は相変わらず仕事に精を出しているらしい。定年退職を間近に控え、業務の引き継ぎで忙しいのだと母が言っていた。母は常日頃、父と僕の近況をそれぞれに伝えることを怠らない。それが家族を家族たらしめていると信じているのだ。

かわりばえのしない毎日だが、この一か月で変わったこともある。母が食事中にテレビをつけるようになったのだ。リビングの大型テレビは台所の食卓からもよく見えるが、母はテレビの方を見向きもしない。

僕が思うに、母は音がほしいのだ。家にひきこもる息子と二人きりで食卓を囲む空気の重さは耐えがたく、かといって沈黙を破ろうとすれば、つい小言が出て息子をさらに追いつめてしまいかねない。その解決策がテレビなのだろう。食事中のテレビをあれほど嫌っていた母だというのに、さすがの僕も申しわけなく思った。

カフェであの二人と話してから、僕はずっと悩み続けている。リカの言うように、僕は正社員になりたいと思っていないのだろうか？

なりたいに決まっているんじゃないか。きんぴらごぼうを呷りながら心の中でリカに反論する。

この一か月というもの、同じ自問自答を繰り返している。一度は声に出して言ってみたが、台詞を棒読みする下手な役者のようだった。

リカ自身は、一般人と同じ土俵で戦うのは無理だと言っていた。だから障害者手帳がほしいのだと。でも僕は、障害者雇用を考える前に、リカが言うところの「一般」で正社員になる可能性をあきらめたくはない。それでいいじゃない、というミサキの声がよみがえる。

正直、働くのが怖い。リカに痛い所をつかれたと思っただのは、そこだ。正社員にはなりたくない。なりたくないが、僕は恐ろしい。

お兄さん、とにかくやってみれば？

リカとミサキの声が重なったところで、次に頭に浮かぶのは何かの工場の中だ。広い空間に白い帽子と白い作業着を身につけた大勢の人がいて、僕もそのうちの一人だ。昨年まで働いていたコンビニ弁当の工場がちょうどこんな感じだった。人々が忙しそうに働くそばで、僕は一人ぼんやりと突っ立っている。視線を感じて顔をあげると、同じく白い帽子と作業着姿の父と兄が、こちらをじっと見ているのだ。

父が帰宅したのは八時ごろだった。リビングのソファに鞆だけを置きにきて、食事の前に風呂に入るのが父の日課だ。僕はといえば、父が風呂からあがる前に夕食を済ませ、二階の自分の部屋に引っこむ。入浴は父のいないうちにシャワーで済ませている。風呂を沸かさないのは、一番風呂はお父さんに、という母の絶対的なルールがあ

るからだ。僕にしても異論はない。

突然、風呂場の方から大きな物音がした。母と僕は顔を見合わせ、次の瞬間、母は椅子を蹴るようにして立ち上がり風呂場の方へ飛んでいった。僕は茶碗と箸を手にしたまま、ぼんやりしていた。テレビのお笑い番組でドツと嬌声があがる。「救急車呼んで！」と母の声がした。「早く！」

僕は立ち上がり、リビングの電話台の子機をつかんで風呂場に向かった。自分の動作がスローモーションのように感じる。脱衣場で母がかがみこんでいた。その下に父のだらんとした手足だけが見えた。

「あ、あの、救急車って何番……」

母が振り向きざまに僕の手から電話の子機をひったくり、ボタンをプッシュしながら「お父さんに服を着せて」と言った。

意識を失くして素っ裸で倒れている父のそばにかがみこむ。動かないものとはかり思っていたら、父がうめいてゴロンと上向きになったので「うわっ」と間抜けな声が出てしまった。

脱衣場のカゴから着替えの下着を取り、父の両足を通す。父に悪いと思っただけ股間を見ないように太もものあたりを見ながら手を動かしていると、もたついてしまった。結局、パンツをはかせただけで母にバトンタッチした。

母が頭を動かさないように注意しながら手早く父に服を着せ、台所のガスの元栓を切り、健康保険証やら財布やら持っていくものをかき集めたところで救急車のサイレンが家の前で止まった。

夢の中の出来事のように実感がなかった。頭がぼんやりしたまま母と一緒に救急車に乗りこみ、近所の総合病院に向かった。

救急外来の待合室で母と二人、どれくらい待っただろうか。別室に呼ばれ、医師から脳梗塞との説明があった。命の別状はない。しかし左半身に麻痺がのこるだろうとのことだった。

入院の手続きをしている時、母の携帯電話が鳴った。兄からだった。うんうんとうなずきながら携帯電話を握りしめる母の目に涙が光っていた。母もすぐく不安で心細かったのだということに、僕は今さらながら気づいた。

兄は急ぎの仕事が片付きしだい病院に来るらしい。「お兄ちゃんが来たら、病室まで案内してあげて」

こういう緊急事態でさえ兄と顔を合わせるのには気が重かったが、今の母にそんなことは言えない。

病院の一階ロビーは照明が落とされ、薄暗かった。正面玄関はすでに閉鎖され、受付カウンターもシャッターが下ろされていた。廊下の照明がロビーの端にわずかに届くだけで、薄闇の中に自動販売機の青い光と、非常口

の緑の光がぼんやりと浮かび、時おり自動販売機がブォンと鳴った。

ロビーのベンチで待っていると、時間外の通用口の方から廊下を急ぐ足音が近づいてきた。慌てて廊下に出ると、兄が「おう」とあごをしゃくった。脱いだ背広を肩に引っかけ持ち、もう片方の手でネクタイを緩めるしぐさが、いかにも仕事のできる男という感じだ。

父の容体を確かめるより先に——母に聞いて知っていたのだろうが——兄はいきなり「お前、就職はどうなった」と聞いた。

「親父もお袋も大変なんだよ。いつまでも親のスネをかじるな」

何だかえらくいらついている。兄はまだ何か言いたそうだったが、僕が一言も発しないせいか、あとは黙って病室までついてきた。

まだ意識の戻らない父と対面した兄が、「親父」と声をかけた時、父の表情がかすかに動いた。母が兄の腕をつかみ、二人して父の顔をのぞきこむ。ベッドの足元に突っ立っていた僕は、そっと病室を出た。

何時間もそばにいた僕がしなかったことを、兄は病室に入ってからわざわざ数分でやってのけた。ベッドの枕元で息がかかるほど顔を近づけ、抑制のきいた声で父に呼びかけ、母に寄り添う。病院の薄暗い廊下を歩きながら、

息をつめて父を見守る兄と母の姿が、まぶたに焼きついて消えなかった。

携帯電話のメール着信音が鳴った。兄からだ。他にメールを送ってくる人間などいないから、確認しなくても分かる。

父が倒れて入院した日、兄と携帯電話のメールアドレスを交換した。強引にアドレスを教えさせられたのだ。それ以来、週に一度はメールが来る。早く定職につけ、という毎回ほぼ同じ内容のメールに、僕はもちろん返信しない。定職、定職と言うが、もし僕が障害者雇用で正社員の仕事に就くとなったら、兄はどう思うだろうか。メールの内容は必ずチェックする。兄は僕に活かっを入れると同時に、この家の家計が逼迫していることを事細かに伝えてくるからだ。

父の年金の少なさには驚いた。兄も、母から聞いた時は驚いたらしい。そのために父は六十五歳で定年退職した後も、再雇用で働こうとしていたのだ。しかし、今回の入院で会社側から無理をしない方がいいと言われ、父の方も会社に迷惑をかけたくないということで再雇用の話はなくなったと、これは母から聞いた。

父の入院中、僕は一日おきに見舞いに行っている。入院二日目には意識が戻り、リハビリを開始するほど病状

も落ち着き、そんな頻繁に面会する必要もないのだが、母がついて来てほしいと言うので仕方がない。

父が入院してから、母は時々めまいを訴えるようになっていた。猛暑のさなか、一人で病院に行くのは不安だと言う。聞くと、母はもともと血圧が高く、病院で薬をもらっているらしい。そんなことも僕は知らなかった。

病院までは自転車で十分ほどの距離で、僕は父の自転車を借りて、母の後ろをついて病院に通った。

見舞いに行くと、父は決まってベッドの端に腰かけていた。左半身に麻痺がのこり、左腕はだらりと太ももの上にのせられている。リハビリの時間以外にも、ベッド柵を右手でつかんで立ったり座ったりして自主練習に励んでいるという。

「運動するのはいいけど気をつけてね。転倒したりしたら元も子もないから」

母が心配そうに眉根を寄せた。

「ベッドで寝ているばかりだと不安になるんだ。このまま歩けなくなったらとか、余計なことを考えてしまう」

「先生は再発予防が大事っておっしゃったけれど、何をどう気をつけたらいいのかしら。お父さんは太ってるわけでもないし。タバコも吸わないし、お酒だってお兄ちゃん来る時しか飲まないし」

兄が家に来るのは盆正月だけだ——通常は。二か月前、四月の「ランドセル事件」は異例の事態だった。その時のことを思い出し、僕はまた気持ちが悪くなった。

「まあ、気をつけるとしたら、運動と食事ぐらいかな」

「食事には気をつかっているつもりだけど……」

そう言ったきり黙りこむ母を見て、父もまぶさかっと思っただけらしい。カーテンで仕切られた狭い空間に気まずい沈黙が漂う。母のしょんぼりした様子に、僕は何か言わなければと唐突に思った。

「よ、よかったね、左手で。……不幸中の幸いって言うか」

苦しまぎれに言うと、父はちらりと僕を見て、ぶっきらぼうに言った。

「俺は左利きだ」

「げ、そうなのか。知らなかった。」

すると母が、父の言葉を空中で払い落とすように腕を振った。

「もう、お父さんだったら。今は右利きでしょ。せっかくこの子が心配してくれているのに、わざと意地悪なこと言ってる」

ふんと鼻を鳴らしてそっぽを向いた父に、母は苦笑いをして僕に目配せした。

「たしか、小学校に上がる前に右利きに矯正したのよね、

お父さん。左利きだと何かと不利だからって、ご両親が心配して。そういう時代だったのよね」

母は持参した大きな紙袋から、タオルやら着替えやらを取り出すとベッド横の棚にしまい、空になった紙袋には家に持ち帰る洗濯物を入れ、テレビに差し込まれたカードの残時間をチェックし、僕には見舞いの花が活けられた花瓶を渡して水を替えてくるよう指示した。

廊下の先の洗面所でガラスの花瓶を水でゆすぎながら、とりあえず母が元氣そうでよかったと僕は安堵した。

しかし、僕が母を心配する以上に、母は僕を心配していた。それが分かったのは、ある晩のことだ。

夕食を食べながら、僕はその日の面会を思い出していた。だらんとした左腕を右手でつかみ、苦痛に顔をゆがめながら、上下に動かし続ける父の姿だ。

そろそろハローワークに行こうかな、と僕がつぶやいたのを、母は聞き逃さなかった。

「お父さんのお見舞いはいいから。そっちを優先して」
母はさりげない口調で、しかしきっぱりと言った。めまいだの付き添ってくれだのというのは、僕を外に連れ出す口実だったのだ。

「分かってる。いいかげん仕事をしろって感じだよね」
「分かってないわ」母が茶碗を置いた。

「就職しろって言ってるんじゃないのよ、私は」

静かだが、よく通る声だった。テレビのプロ野球中継の声の合間を縫って、母の言葉が僕の耳に届く。

「思うように生きてほしいの。それが私の願い。今までいろいろあったかもしれないけど、この先はきつといいこともあると思えるような、そういう——」

テレビの大歓声に母の声がかき消され、「ホームラン、ホームラン」というアナウンサーの絶叫が聞こえた。

「あら、逆転したんだ。お父さんも観ているかしら」

母はテレビを見やり、茶碗を手にとった。

翌日、僕はハローワーク行きを再開した。

三か月も入院したわりに退院時の荷物はごくわずかだった。母がこまめに通って荷物を入れ替えていたからだろう。朝から気温がぐんぐん上がり、真夏のような暑さだ。お彼岸も過ぎたのにねえ、と母が嘆く。暑さが体に堪えるようだ。

リハビリに励んだおかげか、父は医者も驚くほどの回復を遂げた。今では杖なしで歩けるまでになり、ほとんど動かなかった左腕も肩の高さまで上がるようになっていた。

「通勤の電車にも、一人で乗れますよ」

退院の見送りに来たりリハビリ担当者の言葉に、父は何度もうなずいていた。再雇用の話がなくなったことを、

病院のスタッフには伝えていないらしい。

「職場復帰の可能性がないとなったら、リハビリの先生が目録設定を下方修正して、手抜きをしかねないからだって。お父さんらしいわよね」

母が僕にこっそり耳打ちした。根が真面目な父の性格を受け継いで、「吉」と出たのが兄、「凶」と出たのが僕ということだろうか。そんなことを思った。

父が退院して、僕は再び歩いてハローワークに行くようになった。父の入院中は勝手に自転車を借りていたが、自転車を買ってほしいと面と向かつては言えなかった。もう九月も終わりだし、ウォーキングするにはいい季節だし、と照りつける日差しに汗をかきながら、僕は自分に言い聞かせた。

手帳の件はうやむやになったままだ。ハローワークの「長期非正規」相談窓口で、発券機のボタンを押して順番待ちの番号札を受け取り、最後列のベンチに空きを見つけて座る。相変わらずの混雑ぶりだ。手元の「自己分析シート」に目をやる。先ほど入り口の受付でいつものように求職登録カードを見せて通ろうとしたら、「前回の記入から半年以上経っているので、再度ご記入を」と職員から渡されたのだ。受付でも来所者の履歴を管理しているとは知らなかった。情報管理が徹底している。

初めてハローワークに来たのは二月だった。その時は自己分析シートの設問ごとにいちいちつまずき、記入にやたらと時間がかかった。あれから七か月が経つ。前回よりはスムーズに記入できたことに満足し、弱冷房が汗をかいた首筋に当たると感じるながら、うとうとしかけた時だった。後ろからポンポンと肩を叩かれた。

寝ぼけ眼で振り返って「あ」と声が出る。リカとミサキがベンチのすぐ後ろの通路に立っていた。「お兄さん、久しぶり」と、リカが額に手を当てて敬礼の真似をする。その横から「元気だった？」とミサキが言う。

相変わらずおしゃれな二人だった。リカは黒髪にスタイルの良さを強調する黒の服、ミサキは前に会った時と髪と服の色が入れ替わり、今日は白に近い金髪に裾の長いひらひらした緑の服を着ている。

四か月ぶりの再会だった。ふいに懐かしさがこみあげてくる。僕の人生で友人がいたためしはないが、もしいたとしたら、こういう感じなのかもしれない。

「どうしたの、お兄さん」

「また自分の世界に入っちゃった？」

僕はぼんやりしていたらしい。

「これなあに？」

あっと思う間もなく、ミサキの腕が釣りざおのようにしななって僕の自己分析シートを釣りあげた。ミサキが両

腕を前に伸ばして賞状を持つように自己分析シートを広げた。リカが「なにになに？」と横からのぞきこむ。

「特技または好きなこと——なし」

「苦手なもの——人間」

彼女たちは顔を見合わせ、二人同時にこちらを向くと吹き出した。

「な、なにこれ。超ウケるんだけど」

「に、人間、人間が、苦手って。終わってるじゃん」

二人は体をくの字に曲げ、腹をかかえて笑い出した。ベンチや通路にいた人々がいつせいに振り向く。

職員がすつ飛んできた。

「ちよつとあなた方、他の人の迷惑になりますから、騒ぐなら外でお願いします」

職員が、今にも通路に倒れこみそうな二人の体を起こそうとする。

二人はようやく上体を起こすと、笑いすぎて涙がにじむ目で「この人もツレです」と僕の肩を後ろからつかんだ。

リカとミサキに両脇をはさまれる格好で、僕たちはハローワークを後にした。エスカレーターで階を下りる。

「あの、順番待ち、してたんだけど」

「今日は止めといた方がいいよ。あの職員のお婆さんの顔、見たでしょ。おお怖」

「でも、僕は関係ない……」

「なに言ってるの。お兄さんも同罪でしょ」

「いや、同罪どころか主犯格でしょ」

エスカレーターの下の段から二人に上目づかいでにらまれる。

「え、僕のせい……」

すると二人はまた爆笑した。

「お兄さん、ほんと最高だね」

「く、苦しい、もうダメ。これ以上、笑わせないで」

エスカレーターから転げ落ちるのではないかと、ひやひやするほどだった。

駅ビルの外に出ると小雨が降っていた。風が強い。そういうえば今朝のテレビで台風が接近中と言っていた。すぐ近くの地下鉄の出入り口に、風にあおられた雨粒が吸い込まれていく。僕は身震いした。

「私たち地下鉄で帰るけど、お兄さんはどうする？」

「……歩いて帰る」

「家、どのへんなの？」

ここから四つ先の駅を伝えると、二人は「えー」と驚いた。

「歩くには遠くない？」

「そうだよ。雨降ってるし」

雨や風よりも、僕は人が苦手なのだ。自己分析シートに記入したとおりだ。あれほど二人に笑われるとは思わなかった。僕は自分が傷ついていることに、今さら気づいた。人間が苦手というのは「終わってる」のか。

「私と家の方向が同じだから、お兄さん、一緒に地下鉄に乗ろう。お兄さんの方が先に降りるから、見届けてあげる」

リカの声に我に返った。

「あ、いや」

「ほら行くよ」

ミサキが僕の背中を押した。

強い向かい風にリカの長い髪とミサキのひらひらした服がはためく。その後ろ姿はボスキャラに立ち向かう勇者のようだ。はるか昔、夢中になったゲームを思い出す。

二人について行き、地下鉄の駅への階段を下りていく。切符を買うのにもたつき、「げ、私らも分かんない。ふだんICカードだから」と騒ぐ二人の声を聞きつけた駅員が僕の横について、切符の買い方を教えてくれた。

ミサキは家が逆方向で、改札を抜けたところで別れた。「お兄さんの健闘を祈る」と盛大に手を振りながら、ミサキは向かいのホームに下りる階段に消えた。

リカと一緒に地下鉄に乗った。座席はほぼ埋まっている。僕が立っている乗客もいる。僕はドアの付近に立った。

リカは吊り革を持ち、僕のななめ後ろに立った。世間話で僕の気を紛らそうとしてくれる。おかげで二駅目を過ぎたころには、心拍数も平常時に戻りかけていた。

「お兄さんの降りる駅、次だね」

言い終わるか終わらないかのうちにリカの声が悲鳴に変わった。振り向いてリカの視線の先を追うと、大柄な男性が倒れていた。大の字で目を閉じてピクリとも動かない。おおむけに倒れた頭の下が、みるみるうちに赤く染まる。

周りの乗客はみな声も出ずに固まっている。乗客の一人が非常ボタンを押し、別の乗客がスマホで一―九番に連絡した。

地下鉄が徐行運転に切り替わり、「急病人が出たため次の駅でしばらく停車します」という車内アナウンスが繰り返し流れる。

突然、別の車両から女性が飛び込んできた。医療に心得があるらしく、鮮やかな手つきで応急処置を始める。すると別の車両からまた一人、男性が飛び込んできた。倒れた人をはさんで女性の向かいにしゃがみこむ。頭は動かさず、脈を確認し、止血する。二人ともいつさいしやべらない。特別な訓練を受けた者だけが成しうる見事な連携だ。周りの乗客は固唾を呑んで見守るしかない。

駅のホームに担架を持った救急隊の姿が見えた。こち

からも無駄な動きがいつさいない。するべきことを完ぺきに把握した動きだ。処置を施した女性と男性は、担架で運ばれる意識のない男性と共にホームに降りた。女性が救急隊に状況を伝えている。

入れ替わりにモップとゴミ袋を手にした駅員が駆け込んできた。駅員は小さなモップに血を吸わせ、血のしみこんでいないモップの白い部分で床をひと掃きすると、それをゴミ袋につっこんでホームに降り、車両に向かつて一札した。電車が動き出す。床には全く痕跡がない。誰もその場所に近寄らず、スペースがぼっかり空いていた。

次の駅で乗客が乗り込んできた。僕と同世代に見える男性が、つい先ほどまで血だまりだった場所に立つ。周りの乗客がそれとなく目で追う。男性は吊り革に体重を預けてスマホを操作していたが、ふと視線を感じたのか、あたりを見回した。僕も含めて乗客の何人かと目が合った彼の顔に戸惑いの表情が浮かぶ。

ふと思った。電車に乗っていて周りにじろじろ見られる気がするの、ひよっとして誰かの血だまりの上に立ったせいではないだろうか。僕の知らないところで何かが起こり、その直後に、たまたまそこに居合わせてエアポケットに足を踏み入れたのだとしたら。

僕は一人で電車に乗れる気がしてきた。

横を見るとリカが震えていた。片方のこぶしをもう片方の手のひらで包みこみ、祈るように握りしめている。僕の視線に気づくと、リカはさすがのような目で「助かるよね、あの人」とつぶやいた。

降りるはずだった駅を大幅に乗り過ぎ、リカの降りる駅で一緒に降りた。改札口でリカを見送ってから、逆方向の地下鉄で戻ることにした。

「お兄さん、一人で大丈夫？」

心配そうにリカに言われたが、僕はたぶん大丈夫だ。リカの方こそ大丈夫だろうか。

戻りの地下鉄に乗っている間、僕はずっと動悸がしていた。心臓だけでなく、全身が脈を打っている感じがした。体が熱い。それが電車に乗る恐怖からくるものではないことは分かっていた。

自宅の最寄り駅で地下鉄を降りる。降りた後も、まだ神経が昂たかぶっていた。

父と兄はリビングから食卓に移動して、再び飲み始めた。投資信託やら仮想通貨やら金融政策やら、僕にはチンプンカンプンな話で盛り上がっている。

年が替わり、正月に兄家族が来ていた。昨年の盆休みは父が入院していたから、家族が集まるのは甥のランドセルを買った四月以来だ。

僕はリビングのソファに一人残って、目の前のローテーブルに並べられたおせち料理を黙々と食べていた。

兄の子どもたちは二階の和室にこもり、お年玉で買ったばかりのゲームに夢中らしい。子どもたちが戻ってこないうちに自分の部屋に引っこもうと僕は思った。でない、姪っ子にまた何を言われるか分かったものじゃない。

母と兄の奥さんは、台所に立って酒の肴を用意しながら、自分たちも父と兄の横に座り、ワインのグラスを傾けている。僕も正月ぐらいいは飲みたい気がするが、あの食卓の輪に加わるぐらいなら、飲む方を我慢する。

きょうだいゲンカでも起こったのか、二階から弟の翔太の「ギャーン」という派手な泣き声が聞こえ、兄の奥さんが立って様子を見に行った。

リビング兼ダイニングの部屋に、父母と兄と僕の四人だけになった。

「最近、いいことでもあったの？」

母が食卓から声をかけてきた。

「なんだか、雰囲気が変わったみたいだから」

嬉しそうに言う。

「電車に乗れるようになった」

ぼそっとつぶやいてから、しまったと思った。兄がすかさず「なんだって？」と反応する。

「電車？ 電車に乗れなかったの、お前」

母も、しまったという顔をして、食卓の向かいに座る兄に目配せする。その様子がこちらからも丸見えだが、そんなささやかなサインに兄が気づくわけがない。

「マジで終わってんな、こいつ」

兄は僕を一瞥してから、同意を求めるように父と母の方を見た。

母の顔が曇る。父は表情を変えない。

「終わってねえよ、バカ」

思わず大きな声が出た。兄が椅子から飛び上がるようにして振り向いた。

父と母が、ぼかんとして僕を見た。

耳元で声が聞こえた。

——助かるよね、あの入。

再び動き出した地下鉄の中で、両手を強く握りしめたまま、つぶやくリカの姿が目に見えただ。

うん。助かる。

胸の内ですぶやく。僕がソファから立ち上がると、兄がびくっと反応し、背をのけぞらせて椅子にもたれた。

「まだ終わってないから」

僕は兄の目をまっすぐ見て言った。

「お、おう」

兄が小刻みに首を上下に振った。

父と母は、目を見開いたまま固まっている。

半年前に風呂場で倒れた父と、三か月前に地下鉄で倒れた男性の姿が、ほぼ同時に脳裏によみがえった。

「人生が終わるのは死ぬ時だ。死んだら終わりだから」

リビングから食卓に移動しながら、僕は兄から目をそらさずに言った。

兄が目を泳がせた。

「つまり終わってはいない。だって生きてるから」

そうだ。もし人生に始まりと終わりがあるとしたら、生まれる時と死ぬ時だけだ。生きている最中は、始まりも終わりもない。

「何だよ。気持ち悪いな」

兄が顔をしかめた。知らないうちに兄に微笑みかけていたらしい。目の前にあの兄がいるというのに、それを忘れて、僕は別のことを考えていたのだ。

僕が食卓の席につくと、隣に座っている兄が椅子をずらして距離を置いた。

微動だにせず僕らのやりとりを見ていた父が徳利に手をかけ、「お前も飲むか？」と僕に向かって言った。

母も我に返ったように身じろぎした。

「私も、あと少しだけ、ただだこうかしら」

「母さんは血圧が高いんだから、酒はほどほどにした方がいいんじゃないか」

父の言葉に母は口を尖らせた。

「あら、お父さんこそ、脳梗塞をしたあとなんだから、気をつけなさいと」

「俺は退院してから全然飲んでないじゃないか。正月ぐらい飲ませてくれよ」

「それは私のセリフよ」

ふふんと笑った母は、僕の前に酒の肴を移動させ、箸と小皿を用意した。

「こうして家族四人で食卓を囲むと、あなたたちが小さかったころを思い出すわ」

母が微笑む。兄はふてくされた顔で居心地が悪そうに体を動かしたが、席を立つ気配はなかった。

父のかたむける徳利を猪口で受けながら、僕は心の中でもう一度つぶやいた。

大丈夫。助かる。

リビングのドア越しに、兄の奥さんと子どもたちの笑い声が聞こえた。

さつきまで僕が座っていたソファの席に西日が差し込んでる。

一年の最初の日が暮れようとしていた。